

蒙古字韻総括變化之圖の増補時期

吉池孝一

1. はじめに

大英図書館が所蔵する抄本『蒙古字韻』（『倫敦抄本』と称する）は現存する唯一の蒙古字韻であり、朱宗文による校訂の序(序年は1308)が付されている。この『倫敦抄本』が如何なる資料であるかという点、欠落のある「朱宗文本」（1308）を「浙東本」（1269-1308）で補って刊行した「補修本」（刊本一卷）を抄写したものと考えて矛盾はない<sup>1</sup>。その巻首には“蒙古字韻総括變化之圖”（総括變化之圖と略称する）と題された一葉が付されており、朱宗文による増補であることが、ほぼ定説となっている。本稿は、これを朱宗文による増補ではなく、朱宗文の後、元末の「補修本」（刊本一卷）の刊行時に増補されたものと想定する<sup>2</sup>。

これをふまえ、蒙古字韻の沿革につき現時点の考えを示すと表1となる。

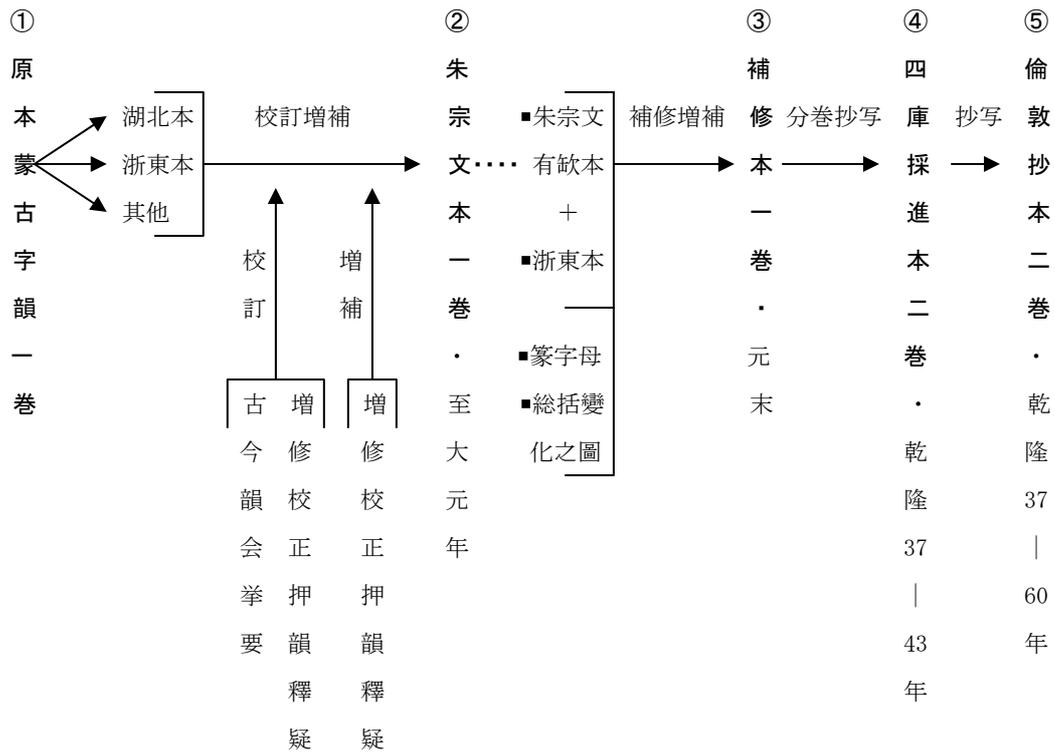


表1

<sup>1</sup> 吉池孝一 2008c による。

<sup>2</sup> かつて吉池 1997 において、総括變化之圖は後代に増補された可能性があるとし、その詳細は他の機会に述べるとした。しかしながら増補の時期及び事情について適当な考えを提示することができなかった。その後、この問題とは別に、吉池 2008c において、欠落のある「朱宗文本」（一卷）を「浙東本」で補って「補修本」（刊本一卷）を元末に刊行したという考えを提出した。しばらくして、この元末における「補修本」の刊行と、総括變化之圖の増補とを結びつけても良いのではないかとの考えに到った。そこで、本図の増補につき述べることにした次第である。

## 2. 朱宗文増補説

総括變化之圖を朱宗文の増補とする説は、次に示す『倫敦抄本』巻首にある劉更序の記述を根拠とする。

趙次公為杜詩忠臣。今朱伯顔增蒙古字韻，正蒙古韻誤，亦此書之忠臣也。然事有至難：以國字寫漢文，天下之所同也，今朱兄以國字寫國語，其學識過人遠甚。此圖為後學指南也，必矣。余嘗有二生來從筆硯，皆通於蒙古之學，踈敏且才，其一、葉素柯也；其一、朱伯顔也。至大戊申暮春之望，柯山劉更 蘭阜謹書。（漢文の句読及び下線は羅常培・蔡美彪 1959 の 87 頁による）

趙次公は杜詩の忠臣であるが、朱伯顔は蒙古字韻を増し【その蒙古字韻の中の】蒙古韻（パスパ文字による音節の綴り）の誤りを正したが故に、この書の忠臣である。さて物事には至難というものがある。国字（パスパ文字）により漢文を書写することは天下の同じくするところであるが、いま朱兄は国字（パスパ文字）により国語（モンゴル語）を書写する。その学識は人を遠く超えている。この図が後学の指南となることは間違いない。・・・以下略す・・・。

この序につき、羅常培・蔡美彪 1959 は次のように述べる。“在‘校正字樣’的後面，又有一個‘蒙古字韻總括變化之圖’，這當即此圖為劉更序中所說的‘今朱兄以國字寫國語，其學識過人遠甚。此圖為後學指南也，必矣’。則這圖當是朱宗文増入的。”（88 頁）。このように、羅常培・蔡美彪 1959 は、“此圖”（この図）を“蒙古字韻總括變化之圖”と解し、朱宗文による増補とするわけである。これがほぼ定説となり今に至っている。

“此書”（この書）が蒙古字韻を指すことは明らかであるとしても、“此圖”が総括變化之圖を指すとなると、いささか唐突の感がある。本稿は、これから述べることに拠り、“此書”も“此圖”も共に蒙古字韻を指すものとする。

## 3. 後代増補の論拠

本稿は、定説とは異なり、総括變化之圖を朱宗文以後の増補とするわけであるが、それは以下の 3 点による。

①本図はパスパ字蒙古語文の音節末子音を漢字音訳する際に利用する図表であるが、その漢字音訳法は明初の『元朝秘史』や『華夷譯語（甲種）』（1389 年序）と同様である<sup>3</sup>。こ

<sup>3</sup> 吉池 1997 参照。総括變化之圖の上半分はパスパ文字が 6 種（m, n, ŋ, v, y, é）並んでおり、下半分にパスパ文字と漢字及び漢語の説明（m 嚙口, p 撲, ・本音, b 嚙口, q 黒, l 頂舌兒, r 轉舌兒, k 刻, g 克, d 忒, é(マ) 赤, s 四, s 卅, 【n】）が並んでいる。この内、g と克、d と忒は、有声子音に当たるパスパ文字 g, d に、無声有気音声母の漢字が対応している。このような特異な対応は明初の『元朝秘史』や『華夷譯語(甲種)』の音節末子音の漢字音訳に見られる。また、q と黒の対応も蒙古語音節末子音の /-g/ に無声摩擦喉音声母の黒を対応させたものとするれば、これもまた『元朝秘史』や『華夷譯語(甲種)』と同様である。このような特異な対応における両者の一致より、総括變化之圖の g と克、d と忒、q と黒を、蒙古語の音節末子音と見ることが出来る。この三種の子音より出発して、総括變化之圖の全体を蒙古語の音節末子音と関係したものとし

の音訳法を元代中期まで遡らせることは難しい<sup>4</sup>。

②本図の表題の体裁は他の表題の体裁と異なる。巻首の“校正字様”、“総括變化之圖”、“字母”、“篆字母”、“總目”の内、“校正字様”、“字母”、“篆字母”、“總目”は、各頁の左端に縦に書かれている。しかも先にパスパ字漢語がありその下に同じ内容の漢字漢語が続く。このような表題の付け方がこの書の普通のあり方とみて間違いない。ところが、本図の題は異なる。頁の左端ではなく、円形の図の上に漢字で“蒙古字韻総括變化之圖”とある。しかも対応するパスパ字漢語はない。

③本図の題中の“総”という字体は他の部分では用いられない。『倫敦抄本』のなかにこの漢字は三回現れる。一つ目は表題である“蒙古字韻総括變化之圖”の“総”、二つ目は表題の“總目”の“總”、三つ目は本文上九の韻字の“總”である<sup>5</sup>。

上に挙げた3点の内、②③は本図が後代の増補であることを示唆し、①は増補の時期が明初の『元朝秘史』や『華夷譯語（甲種）』（1389年序）からそれほど遠くない頃であったことを示唆する。次に①の蒙古語音節末子音の漢字音訳法について今少し詳しく述べる。

#### 4. 蒙古語音節末子音の漢字音訳法

明初の『元朝秘史』や『華夷譯語（甲種）』（1389年序）では蒙古語の幾つかの音節末子音を特定の漢字で表記する。『元朝秘史』は/-g/を黒で、/-d/を惕で、/-g/を克・乞で、/-b/をトで表記し、『華夷譯語（甲種）』は、/-g/を黒で、/-d/を惕で、/-g/を克で、/-b/をト・必で表記する。音韻的に有声音であることが想定される音節末子音/-g/、/-d/、/-g/を、漢語の無声有気音の黒、惕、克・乞で音訳する。

蒙古字韻『倫敦抄本』巻首の総括變化之圖では、パスパ文字 q (-g/) に黒が対応し、パスパ文字 d (-d/) に忒が対応し、パスパ文字 g (-g/) に克が対応する。パスパ文字 b (-b/) には音訳漢字ではなく説明的な表現の“噤口”（口を閉じる音）が対応する。音節末子音/-g/、/-d/、/-g/に漢語の無声有気音の黒、忒、克が対応しており、音訳漢字の当て方の方式は、明初の『元朝秘史』や『華夷譯語（甲種）』と同様である。このような特異な音訳法を、実際の音訳資料において、どこまで遡らせることができるかということが問題となる。もし

---

で見直すと次のようになる。すなわち、この図中のパスパ文字はパスパ字蒙古語文（外来語を含む）において音節末に位置する子音および子音的母音を列挙し、その用法の説明と音訳漢字を対応させたものである。図の上半分は漢語音の韻尾をそのまま利用して音訳し得る子音及び子音的母音であり、下半分は漢語に無い音節末子音及び漢語にも有るのだがそのままでは利用しにくい音節末子音である。もっとも、実際の言語音としての音節末子音だけでなく文字表記の上で音節の末尾に位置する子音文字をも含む。文字表記上の音節末尾の子音とは“・本音”や“k'刻”などである。

<sup>4</sup> 後代の増補とすることは早くは吉池 1997 に見える。“「総括図」を含む『蒙古字韻』の成立は 1308 年以前である。したがって、『華夷譯語・甲』（1389 年序）や『元朝秘史』（明初）と同一の漢字音訳法が、ほぼ 80 年も前に既に確立していたということになる。これは驚くべきことである。しかし、「総括図」が『華夷譯語・甲』や『元朝秘史』等の漢字音訳蒙古語と共に成立したか、場合によっては漢字音訳蒙古語の影響を受けてその後で成立したという可能性もないわけではないので注意が必要である。……私は現在のところ後者の増補説に傾いているが、なお考えるべき点もあり、その詳細を述べることは他の機会にゆずりたい。”（86 頁）

<sup>5</sup> この点については吉池 1997 で指摘した。

も「朱宗文本」(1308)と同時期に同様の音訳法が見られるならば、総括變化之圖を朱宗文が増補した図とみて何ら問題はない。

そこで、蒙古語と漢語が対訳となった碑文(1253-1351)11種、宣勅(版本)(1300, 1308)2種、官印(1317, 1355)2種、語彙集『至元譯語』(1325)に拠り、 $/-g// -d// -g// -b/$ の四種につき対応する音訳漢字を調査した<sup>6</sup>。初歩的な調査ではあるがそれによると、①語末では $/-g// -d// -g// -b/$ は表記されない。②語中においては表記されることもある。③語中において $/-d// -g/$ を無声有気音の漢字で音訳するような例は見られないという三点を確認することができた。資料については末尾に添付したので参照願いたい。いま、蒙古語音節末子音 $/-g// -d// -g// -b/$ につき、語中で表記する例を挙げると次のようである。

- ・ $/-g/$ に対応する音訳漢字。“黒/ $x-$ ”が1例(1253年聖旨碑)。“合/ $x-$ / $or/v-$ ”<sup>7</sup>が2例。“急/ $k-$ ”が1例(“忽/ $x-$ ”の誤記か)。
- ・ $/-g/$ に対応する音訳漢字。“古/ $k-$ ”が1例。
- ・ $/-d/$ に対応する音訳漢字。“都/ $t-$ ”が1例。
- ・ $/-b/$ に対応する音訳漢字。 $/-m/$ 韻尾が5例“勘、南、斂、黯、欽”。“不/ $p-$ ”が1例。

『元朝秘史』や『華夷譯語(甲種)』においては $/-g/$ に“黒”が専用の音訳字として対応するわけであるが、1253年の聖旨碑に同様の音訳法が見える。元代の資料には他に“合”や“急”(“忽”の誤か)がある。これらが後に“黒”に統合されたと見てよいのであろう。 $/-g// -d// -b/$ に対応するものとして、無声無気音の“古/ $k-$ ”、“都/ $t-$ ”、“不/ $p-$ ”がある。『元朝秘史』や『華夷譯語(甲種)』のように $/-g// -d/$ に無声有気音の音訳漢字“克/ $kh-$ ”や“惕/ $th-$ ”を当てる法は未だ見られない。

以上を要するに、総括變化之圖と『元朝秘史』『華夷譯語(甲種)』に共通する音訳法を「朱宗文本」(1308)が成った元代中期まで遡らせることは難しい。したがって、この図は「朱宗文本」(1308)で増補されたものではなく、それ以降の増補とすることができる。

## 5. おわりに

総括變化之圖は、蒙古語音節末子音 $/-g// -d// -g/$ に漢語の無声有気音の黒忒克を対応させる。このような音訳法は元代中ごろには見られない。そうであるならば、本図が作られた時期を、「朱宗文本」の至大戊申(1308年)まで遡らせることは難しい。そこで本稿は、本図を元末まで引き下げ、それが明初に練り上げられて『華夷譯語(甲種)』(1389年序)の“華夷譯語凡例”の如き音訳法となったと想定する。

この想定が正しいとしたならば、元末に総括變化之圖が存在し、それに蒙古字韻という書名を付し“蒙古字韻総括變化之圖”として「補修本」(刊本一卷)の刊行時に増補したとい

<sup>6</sup> 吉池 2009d による。

<sup>7</sup> “合”は北方の字音では無声音/ $x-$ /となっていたと想定し得るが、本来は全濁音の匣母字であるから、ある種の字音では有声音の/ $v-$ /のような音であった可能性もある。

うことになる。そのように見ると、先に、劉更序の“此書”（この書）が蒙古字韻を指すことは明らかであるとしても“此圖”が総括變化之圖を指すとなるといささか唐突の感があると述べたが、“此書”および“此圖”の両者につき蒙古字韻を指すものとして劉更の序文を読むことになる。

もつとも、総括變化之圖の成立が、『元朝秘史』や『華夷譯語（甲種）』（1389年）の直前の明初であるという想定も捨てきれず、もしそうであるならば「補修本」（刊本一卷）の刊行時期も明初ということになる。この点についてはなお検討を要する。

〈資料〉<sup>8</sup>

これよりパスパ文字は脚注の方式によってローマ字に翻字し提示する<sup>9</sup>。

1. 対訳碑文

蒙古語と漢語が対訳となった元代碑文により音訳漢字を見ると次のようである。資料は中村 淳・松川 節 1993 および照那斯圖 1991 および呼格吉勒圖・薩如拉 2004 により蒙古字の翻字と転写を提示する。

■蒙古字蒙古語。

少林寺聖旨碑第1截・少林長老福裕宛モンケ皇帝ウシ年（1253）聖旨

TWRWXT'Y (Turuytai) 禿魯黒台(人名)

少林寺聖旨碑第2截・少林長老福裕等宛クビライ皇帝トリ年（1261）聖旨

博士 P'XSY (baysi) 八合赤

少林寺聖旨碑第3截・足庵浄肅宛クビライ皇帝タツ年（1268）聖旨

博士 P'XSY (baysi) 八合失

語中において、蒙古文字-γ（パスパ文字-q、元朝秘史・華夷訳語（甲種）“黒/x-/'”）に音訳漢字の“黒”“合”が対応する。

■パスパ字蒙古語

・少林寺聖旨碑第4截・ $\text{ᠠᠮᠤᠪᠠᠯᠠᠷᠠᠭ}$  鼠年（1312）聖旨、普顔篤皇帝虎年（1314）聖旨（1）（2）（3）（4）、普顔篤皇帝馬年（1318）聖旨、妥懽帖睦魯皇帝猪年（1335）聖旨、妥懽帖睦魯皇帝兔年（1351）聖旨の各碑文において、皇帝名 k'eu-lug, k'eu-leug に音訳漢字“曲律”が対応する<sup>10</sup>。

・妥懽帖睦魯皇帝猪年（1335）聖旨、妥懽帖睦魯皇帝鼠年（1336）聖旨、妥懽帖睦魯皇帝兔年（1351）聖旨の各碑文において、皇帝名 qu-t'uq-t'u に音訳漢字“護都篤（1335）”“忽都圖（1336）”“忽都篤（1351）”が対応する。

k'eu-lug (leug) をみると、語末の lug (leug) は“律”で音訳されており、パスパ文字-g (元朝秘史・華夷

<sup>8</sup> 吉池孝一 2009d による。

<sup>9</sup> 〈音〉  $\text{ᠠ}$  g  $\text{ᠨ}$  k'  $\text{ᠠ}$  k  $\text{ᠨ}$  ᠨ  $\text{ᠳ}$  d  $\text{ᠲ}$  t'  $\text{ᠨ}$  t  $\text{ᠨ}$  n  $\text{ᠯ}$  l  $\text{ᠪ}$  b  $\text{ᠫ}$  p'  $\text{ᠫ}$  p  $\text{ᠮ}$  m  $\text{ᠮ}$  f (  $\text{ᠮ}$  f1 奉母  $\text{ᠮ}$  f2 非敷母。f1, f2 の区別がない場合は f とする。1 は旧濁音、2 は清音。以下数字を用いるものは同様)、 $\text{ᠮ}$  v  $\text{ᠡ}$  j  $\text{ᠮ}$  č'  $\text{ᠮ}$  č  $\text{ᠨ}$  ṅ  $\text{ᠨ}$  š (  $\text{ᠨ}$  š1 禪母  $\text{ᠨ}$  š2 審母)  $\text{ᠮ}$  ž  $\text{ᠨ}$  j  $\text{ᠮ}$  c'  $\text{ᠮ}$  c  $\text{ᠨ}$  s  $\text{ᠨ}$  z  $\text{ᠮ}$  h (  $\text{ᠮ}$  h1 匣母  $\text{ᠮ}$  h2 曉母)  $\text{ᠮ}$  γ,  $\text{ᠮ}$  y (  $\text{ᠮ}$  y1 喻母  $\text{ᠮ}$  y2 幺(影)母)  $\text{ᠮ}$  '  $\text{ᠮ}$  r  $\text{ᠮ}$  q (半母音)  $\text{ᠮ}$  ü  $\text{ᠮ}$  i (母音)  $\text{ᠮ}$  u  $\text{ᠮ}$  i  $\text{ᠮ}$  é  $\text{ᠮ}$  e  $\text{ᠮ}$  o とし、母音 a は丸括弧( ) を付して補写する。

<sup>10</sup> 普顔篤皇帝虎年（1314）聖旨（1）および妥懽帖睦魯皇帝猪年（1335）聖旨は k'eu-leug。

訳語(甲種)“克/kh-”、文語-g)に対応する独立した音訳漢字はない。qu-t'uq-t'uをみると、語中のt'uqは“都”で音訳されており、パスパ文字-q(元朝秘史・華夷訳語(甲種)“黒/x-”、文語-γ)に対応する独立した音訳漢字はない。なお、無声有気音のパスパ文字t'に、無声無気音声母の“都、篤”が対応するのはなぜかという問題もあるが論旨に係わらないのでここでは言及しない。

## 2. 対訳宣勅(版本)

元の呉澄に授けられたパスパ字漢語の宣勅資料11通が収められた明・永楽四年(1406)刊行『臨川吳文正公草廬先生集』がある。これらの資料は神田1969による。

■大徳四年(1300)の勅に'eo-g(a)-pu-q(a)月古不花(人名)とある。'eo-g(a)は、'eog-とあったものを、明代の翻刻時において音訳漢字“月古”に合わせて二分したものであろう。

■至大元年(1308)の勅にbo-lod-t'e-mu-r(a)波羅帖木兒(人名)、bo-lod-t'(a)-s(a)波羅達識(人名)とある。mu-r(a)およびt'(a)-s(a)は、mur-およびt'(a)sとあったものを、明代の翻刻時において音訳漢字“木兒”および“達識”に合わせて二分したものであろう。

'eog-pu-q(a)をみると、語中のパスパ文字-g(元朝秘史・華夷訳語(甲種)“克/kh-”、文語-g)に無声無気音の“古/k-”が対応する。bo-lod-t'e-murおよびbo-lod-t'(a)sをみると、語中のパスパ文字d(元朝秘史・華夷訳語(甲種)“楊/th-”、文語-d)に対応する独立した音訳漢字はない。

## 3. 対訳官印

元代の官印には、印面にパスパ字漢語もしくはパスパ字蒙古語、背の部分に漢語で造印の年月と印面の内容を刻したものがあつたものがある。これより紹介するのは印面のパスパ字蒙古語と背記の音訳漢字が対応したものである。

■背記は“万州諸軍奥魯印／中書礼部／延祐四年八月 日造”(1317年)。華光普1998(429頁)による。

印面：'(a)-u-ruq 背記：奥魯 — 『元朝秘史』老小營(陣營の意)“阿兀[舌]魯(黒)”

■背記は“鎮寧州諸軍奥魯印／中書礼部／至正十五年七月 日造”(1355年)。黄惇1999(49頁)による。

印面：'(a)-u-ruq 背記：奥魯 — 『元朝秘史』老小營(陣營の意)“阿兀[舌]魯(黒)”

語末のパスパ文字-q(元朝秘史・華夷訳語(甲種)“黒/x-”、文語-γ)に対応する独立した音訳漢字はない。なお『元朝秘史』との対応は照那斯圖1977(78頁)で既に指摘されている。

## 4. 『至元譯語』(『蒙古譯語』とも称す)

この書の最も古い版本は元の泰定乙丑年(1325)に基づいた元禄12年(1699)の日本刊本であるから、少なくとも泰定乙丑年(1325)以前のものである。かりに書名の“至元”が年号であるとしたならばフビライの至元年間(1264-1294)のものということになるが、それは分らない。この書と『華夷譯語(甲種)』『元朝秘史』との比較対照は、既に長田1953にあるので、それを利用し、やや補充と訂正を加えて提示する。なお、( )によって小字で書かれた音節末子音を、[ ]によって音節初頭子音の音質を指示した小字の漢字を示すことにする。右端の文語形はLessing1960による。所謂乙種本『華夷譯語』<sup>11</sup>に付された蒙古字の音形が文

<sup>11</sup> 『北京圖書館古籍珍本叢刊6』(北京：書目文出版社)による。

語と異なる場合は(乙種本)として音形を記す。なお乙種本は複数あり、音形が異なるものは複数提示する。

#### 文語-γ

19. 泉“布刺” — 『華夷譯語(甲種)』 “布刺(黒)” 一文語 bulay  
139. 甲“忽耶” — 『華夷譯語(甲種)』 『元朝秘史』 “[中]忽牙(黒)” 一文語 quyay  
144. 旗“秃” — 『元朝秘史』 “秃(黒)” 一文語 tuy  
195. 黒豆“匣刺不奴叉” — 『華夷譯語(甲種)』 “ト兒察(黒)” 一文語 burčay  
402. 蒜“撒林撒” — 『華夷譯語(甲種)』 “撒[舌]林撒(黒)” 一文語 sarimsay  
474. 一宿“你干豁納” — 『元朝秘史』 “[中]豁那(黒)” 一文語 qonuy

- 98. 騙馬“阿急答” — 『華夷譯語(甲種)』 『元朝秘史』 “阿(黒)塔” 一文語 ayta

語末の-γ (パスパ文字-q、元朝秘史・華夷訳語(甲種) “黒/x-”) に対応する独立した音訳漢字はない。

98 番をみると、語中の-γに無声無気音の“急”が対応するのであるが、長田 1953 はこれを“忽”とする。“急”には/k-/が、“忽”には喉の摩擦音/x-/が想定される。先の少林寺聖旨碑において、蒙古文字-γ (パスパ文字-q、元朝秘史・華夷訳語(甲種) “黒/x-”) に喉の摩擦音声母を持つ“黒” “合”が対応した例をみたわけであるが、長田 1953 の見立てのように“忽”が正しいとしたならば、少林寺聖旨碑の例と平行した関係となる。おそらく、ごく早い時期に字形の類似により“忽”が誤って“急”とされ諸版本に引き継がれたのであろう。

#### 文語-g

210. 馬娘子“兀宿” — 『華夷譯語(甲種)』 『元朝秘史』 “額速(克)” 一文語 esüg  
297. 文書“必赤” — 『華夷譯語(甲種)』 『元朝秘史』 “必赤(克)” 一文語 bičig  
300. 筆“俗肅” — 『華夷譯語(甲種)』 “兀租(克)” 一文語 üjüg, üstüg  
378. 花“掣掣” — 『華夷譯語(甲種)』 “扯扯(克)” 一文語 čečeg

語末の-g (パスパ文字-g、元朝秘史・華夷訳語(甲種) “克/kh-”) に対応する独立した音訳漢字はない。

#### 文語-d

307. 珠子“速不” — 『華夷譯語(甲種)』 『元朝秘史』 “速不(惕)” 一文語 subud  
319. 鷗“不魯昆” — 『華夷譯語(甲種)』 黒鷹 “不魯骨(惕)” 一文語 bürgüd, (乙種本) būrugüd  
○204. 焼餅“兀都麻” — 『華夷譯語(甲種)』 “兀(惕)箴(克)” — (乙種本) 兀惕箴克 üdme, 兀麻 üdmeg

語末の-d (パスパ文字-d、元朝秘史・華夷訳語(甲種) “惕/th-”) に対応する独立した音訳漢字はない。語中の-d に無声無気音の“都/t-”が対応する。

#### 文語-b

48. 絃匠\* “勘直” — 関連語彙として：『華夷譯語(甲種)』 弓弦(弓のつる) “闊(ト)赤” 一文語 köbči (弓のつる) \*弓のつるを作る職人であろう  
○189. 弓絃 “欽不喫” — 『華夷譯語(甲種)』 “闊(ト)赤” 一文語 köbči  
397. 葉兒 “南赤” — 『華夷譯語(甲種)』 “納(ト)陳” 一文語 nabči

456. 十月“怯斂都児” — (乙種本) “客勒卜秃児撒刺 kel(e)btür sara”

495. 将来“黯赤列” — 『元朝秘史』 将来着“阿(卜)赤[舌]刺周” — 文語 abčiraqu

語末の例はない。○を付した 189 番以外は、語中の -b(パスパ文字 -b、元朝秘史・華夷訳語(甲種) “ト/p-/、必/p-/”)に対応する独立した音訳漢字はない。しかしながら、“勘/-m/、南/-m/、斂/-m/、黯/-m/”は全て/-m/韻尾を持つことから、この韻尾によって、調音位置が同じ -b の表記を意図したとみることができ。189 番の“斂”もやはり/-m/韻尾をもつ。この例はさらに無声無気音の“不/p-/”を添加して蒙古語の音節末子音 -b を表記する。おそらく、最初は“斂喫”であり、何らかの理由によりその後“不”が加えられて“斂喫”となり、二重の表記に見えているのであろう。

なお長田 1953 は『至元譯語』の蒙古語の音韻特徴を挙げるわけであるが、その中で語末の閉鎖音の一部につき“-γ, -g の脱落(あるいは表記しないこと)”と指摘する。蒙古語自体の音韻特徴であるかもしれないし、そうではなくて表記上の問題にすぎないかもしれないという慎重な態度は、元代蒙古語の漢字音訳法を調査する上で常に心しなければならぬところであろう。

なお、語末において、文語 -γ, -g, -d に入声字(中古の /-k/ /-t/) が対応しているように見える個所もあるが、それは有意味なものではなく、全体としてみれば語末の閉鎖子音は表記されないのが原則とみて大過ないであろう。語中の例については 2 つあり、両者とも対応する音訳漢字を持つ。98 番は文語 -γ (中期蒙古語 /-g/、パスパ文字 -q、元朝秘史・華夷訳語(甲種) “黒”、総括变化之圖 “黒”) に無声無気音 /k-/ の“急”が対応する。もっともこれは“忽”の誤であるかもしれない。現存する『至元譯語』(『蒙古譯語』とも称す)の総ての版本において“急”となっているが、長田 1953 は“忽”とする。ごく早い時期に誤記が起こったとしたならばこのようなことも起こり得る。204 番の文語形はよくわからないが『華夷譯語(甲種)』では“兀(揚)篋(克)”とあるから、音節末の“揚”(中期蒙古語 /-d/、元朝秘史・華夷訳語(甲種) “揚”、総括变化之圖 “忒”) に無声無気音 /t-/ の“都”が対応している。

#### <参考文献(発行年順)>

長田夏樹 1953. 「元代の中・蒙対訳語彙『至元訳語』」, 『神戸大論叢』第 4 卷第 2・3 号, 91-118 頁。『長

田夏樹論述集(上) 近代漢語の成立と胡漢複合文化』(ナカニシヤ出版。2000 年)所収。

関西大学東西学術研究所 1956. 『影印大英博物館蔵舊鈔本蒙古字韻』大阪: 関西大学。

羅常培・蔡美彪 1959. 『八思巴字與元代漢語 [資料彙編]』北京: 科学出版社。

Lessing, F. D. et al. 1960(1995). *Mongolian-English Dictionary*. Original edition: 1960.

Third re-printing: 1995.

尾崎雄二郎 1962. 「大英博物館本蒙古字韻札記」, 『人文』第 8 集, 162-180 頁。

神田喜一郎 1969. 「八思巴文字の新資料」, 『東洋學文獻叢説』東京: 二玄社。

鄭再發 1965. 『蒙古字韻跟八思巴字有關的韻書』台北: 国立台湾大学文学院。

橋本萬太郎 1971. 「ブリテン博物館蔵旧抄本蒙古字韻雜記」, 『AA 研通信』14, 1-4 頁。

兪昌均 1973. 『較定蒙古韻略』台北: 成文出版社。

照那斯圖 1977. 「元八思巴字篆書官印輯存」, 『文物資料叢刊 I』北京: 文物出版社, 68-83 頁。

- 照那斯圖 1980. 「八思巴字篆体字母研究」, 『中国語文』1980年第4期, 307-309, 269頁。
- 照那斯圖・楊耐思 1987. 『蒙古字韻校本』北京: 民族出版社。
- 黄愛平 1989. 『四庫全書纂修研究』北京: 中国人民大学出版社。
- 遠藤光暁 1990. 「在欧のいくつかの中国語音韻史資料について」, 『中国語学研究 開篇』第7号, 25-44頁。
- 花登正宏 1990. 「《蒙古字韻校本・校勘記》校補」, 『東北大学文学部研究年報』第三十九号, (216)-(208)頁。
- 照那斯圖 1991. 『八思巴字和蒙古語文献 II 文献匯集』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- 寧忌浮 1992. 「《蒙古字韻》校勘補遺」, 『内蒙古大学学报(哲学社会科学版)』1992年第3期, 9-16頁。
- 中村 淳・松川 節 1993. 「新発見の蒙漢合璧少林寺聖旨碑」, 『内陸アジア言語の研究』VIII, 1-92頁+図版8。
- 吉池孝一 1993a. 「『蒙古字韻』の増補部分について」, 『語学研究』(拓殖大学語学研究所)第72号, 17-31頁。
- 吉池孝一 1993b. 「『蒙古字韻』の元刊本と乾隆写本」, 『中国語学』(日本中国語学会)第240号, 31-40頁。
- 遠藤光暁 1994. 「『四声通解』の所拠資料と編纂過程」, 『論集』(青山学院大学)第35号, 117-126頁。
- 中村雅之 1994. 「『蒙古字韻』と『古今韻会举要』」, 『富山大学人文学部紀要』第20号, 147-162頁。
- 中村雅之主編 1994. 『パスパ字漢語資料集覧』富山大学人文学部中国語学研究室内ハスハ字研究会。
- 吉池孝一 1995. 「『蒙古字韻』のロンドン写本とその複製本」, 『語学研究』(拓殖大学語学研究所)第78号, 197-208頁。
- 花登正宏 1997. 『古今韻會舉要研究』東京: 汲古書院。
- 吉池孝一 1997. 「中世蒙古語の漢字音訳と「蒙古字韻総括変化之図」」, 『日本モンゴル学会紀要』第27号(1996), 77-90頁。
- 寧忌浮 1997. 『古今韻會舉要及相關韻書』北京: 中華書局。
- 華光普 1998. 『中国歴代印章目録』北京: 中国民族攝影藝術出版社。
- 黄 惇 1999. 『中国歴代印風系列 元代印風』重慶: 重慶出版社。
- 中村雅之 2003. 「四声通解に引く蒙古韻略について」, 『KOTONOHA』第9号, 1-4頁。
- 呼格吉勒圖・薩如拉 2004. 『八思巴字蒙古語文献匯編』呼和浩特市: 内蒙古教育出版社。
- 吉池孝一 2005. 「パスパ文字の字母表」, 『KOTONOHA』第37号。
- Coblin, W. South. 2007. *A Handdook of 'Phags-pa Chinese*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- 吉田順一・チメドルジ 2008. 『ハラホト出土モンゴル文書の研究』東京: 雄山閣。
- 吉池孝一 2008a. 「蒙古字韻の改装などについて」, 『KOTONOHA』第65号, 11-12頁。
- 吉池孝一 2008b. 「蒙古字韻の校訂と増補について」, 『KOTONOHA』第70号, 7-16頁。
- 吉池孝一 2008c. 「蒙古字韻の補修について」, 『KOTONOHA』第71号, 1-9頁。
- 吉池孝一 2008d. 「原本蒙古字韻再構の試み」, 『International Workshop on Hunminjeongeum and hPags-pa script』韓国学中央研究院(2008年11月), 141-155頁。
- 中村雅之 2008. 「パスパ文字の字母表について」, 『KOTONOHA』第73号, 1-3頁。
- 韓国学中央研究院研究處編集 2008. 『蒙古字韻』(影印本。解題: 鄭光)韓国城南市: 韓国学中央研究院。
- 吉池孝一 2009a. 「蒙古字韻四庫採進本及び現存写本の書写時期」, 『KOTONOHA』第74号, 41-43頁。

- 吉池孝一 2009b. 「原本蒙古字韻考」, 『KOTONOHA』第 81 号, 10-17 頁。
- 吉池孝一 2009c. 「蒙古字韻の篆字母表について」, 『KOTONOHA』第 82 号, 13-18 頁
- 吉池孝一 2009d. 「元代の漢字音訳法 —蒙古語の音節末閉鎖音について—」, 『KOTONOHA』第 83 号, 11-17 頁
- 吉池孝一 2009e. 「原本蒙古字韻の復元 —校正字様の各本重入漢字をめぐって(1)—」, 『KOTONOHA』第 85 号, 13-20 頁。
- 吉池孝一 2010a. 「原本蒙古字韻の復元 —校正字様の各本重入漢字をめぐって(2)—」, 『KOTONOHA』第 86 号, 16-24 頁。
- 吉池孝一 2010b. 「原本蒙古字韻の復元 —校正字様の湖北本誤をめぐって—」, 『KOTONOHA』第 87 号, 12-18 頁。
- 吉池孝一 2010c. 「原本蒙古字韻の復元 —校正字様の浙東本誤をめぐって—」, 『KOTONOHA』第 91 号, 12-20 頁。